

2018年度 パラグアイ

教師海外研修報告書



独立行政法人 国際協力機構（JICA）四国センター

【後援】外務省、文部科学省

香川県教育委員会、徳島県教育委員会、高知県教育委員会、愛媛県教育委員会

目 次

教師海外研修とは？

- 教師海外研修の目的／応募条件／派遣期間／募集時期／2018 年度の研修国「パラグアイ」について 1
- 教師海外研修のながれ 2
- 海外研修日程 3
- 参加者氏名 5
- 海外研修レポート 6

JICA 四国 教師海外研修とは？

■教師海外研修の目的

JICA は、諸外国との関係や異文化理解の学習について、国際協力を通じて培った経験や人材、ネットワークを活用し、積極的に支援を行っています。この教師海外研修は国際理解教育／開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その経験を次代を担う児童・生徒の教育に役立てていただくことを目的として実施しています。研修参加後は、教育現場で国際理解教育・開発教育を推進する中核となるような人材となってもらうことを期待しています。

■応募条件

四国 4 県の国公立・私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校教員及び教育委員会の指導主事等で、応募締切り時点で年齢が原則 50 歳以下であり、所属長または教頭の推薦が得られる方（JICA から海外に長期派遣された経験のある方は除きます）

■派遣時期

8 月 8 日（水）～8 月 18 日（土）

※派遣時期は、実施年度により変わります。

■募集時期

毎年 4 月上旬から 5 月中旬

※毎年、四国内全ての学校に応募要項をお送りしています。

■2018 年度の研修国「パラグアイ」について

(1) 正式名称

(和文) パラグアイ共和国

(英文) Republic of Paraguay

(2) 政体 立憲共和制

(3) 人口 約 685 万人 (2016 年 パラグアイ統計局)

(4) 首都 アスンシオン

(5) 面積 40.7 万平方キロメートル (日本の 1.1 倍)

(6) 民族 先住民と欧州系の混血 95%、先住民 2%、欧州系 2%、その他 1%

(7) 言語 スペイン語、グアラニー語 (ともに公用語)

(8) 宗教 主にカトリック

(9) 一人当たり GNI 4,070 ドル (2016 年 世銀)

(10) 主要貿易品目 (輸出: 大豆、牛肉、植物油、小麦、穀類)

(輸入: 機会、原油・燃料、自動車)

【参考】「外務省ホームページ-各国・地域情勢-」外務省





教師海外研修の流れ

参加決定から報告会まで、1年間にわたる研修の流れをご紹介します。

6月

国内事前研修

国内事前研修～海外研修に向けた準備～

国内事前研修では、JICAやODAについての知識に加え、訪問国の現状、開発課題等への理解を深めるとともに、現地研修での「視点」について考えます。また、研修後の授業立案に向けて国際理解教育・開発教育を実践するためのスキルアップを図ります。



8月

海外研修

海外研修～帰国後の授業に向けた素材集め～

JICAプロジェクトサイト・JICAボランティア活動現場・現地の学校の視察(交流授業の実施等含む)や、現地マーケットで教材研究のための素材収集等を行います。



8月
下旬

国内事後研修

国内事後研修～授業実践に向けた準備～

海外研修を振り返りながら、それぞれの情報を共有します。今後、授業でどのように伝えていくか、アイデアを出し合いながら参加者全員で授業計画を考えます。



9月
1月

授業実践

授業実践

それぞれの学校で国内・海外研修での学びを活かした授業を実践していただきます。子どもたちが、何を知り、どう行動するようになるよいか、海外での経験と国内での研修の成果をいかに発揮しましょう。

2月

報告会

報告会&国際理解教育セミナーでの報告

「海外研修で何を学び、どう授業に活かしたか」を参加者間で情報共有し、「その授業で子供たちが何を学び、どんな変化が見られたのか」など国内外での研修の成果を報告します。



研修参加後は、所属校で継続的に授業を行い、四国の国際理解教育・開発教育を推進する中核となって活躍していただきます。

海外研修日程

日順	日付	プログラム	滞在先
1	8月8日 (水)	成田空港発 (16:30 発)	(機内泊)
2	8月9日 (木)	成田空港→アトランタ→サンパウロ→アスンシオン空港着 (12:55) 【JICA パラグアイ事務所訪問】 ・ JICA パラグアイ事業概要説明、ブリーフィング	アスンシオン
3	8月10日 (金)	【青年海外協力隊活動現場視察】 ・ NIHON GAKKO 【カテウラ地区視察】 ・ カテウラ音楽団 【教材購入】 ・ 英雄広場	アスンシオン
4	8月11日 (土)	【日系社会視察】 ・ アスンシオン日本語学校 【移動】 ・ アスンシオン→イグアス市 【ホームステイ】 ・ 各家庭で交流	イグアス市、 ホームステイ先
5	8月12日 (日)	【ホームステイ】 ・ 各家庭で交流 【日系社会視察】 ・ 移住史料館訪問 ・ 四国出身の方と懇親会	イグアス市
6	8月13日 (月)	【日系社会視察】 ・ イグアス日本人会訪問 【移動】 ・ イグアス市→ポトレロ・グアジャキ市 【青年海外協力隊活動現場視察】 ・ ポトレロ・グアジャキ市保健ポスト 【移動】 ・ ポトレロ・グアジャキ市→イタウグア市 ・ ニヤンドゥティ生産者宅訪問	イタウグア市
7	8月14日 (火)	【移動】 ・ イタウグア市→サン・ロレンソ市 【現地学校 & 青年海外協力隊活動現場視察】 ・ サン・エンリケ・デ・オッソ小学校 【プロジェクト視察】 ・ 産業界のニーズに応える高度技能人材育成プロジェクト	アスンシオン

		@国家職業訓練局 【障がい者支援施設視察】 ・ペケニョ・コットレンゴ財団訪問	
8	8月15日 (水)	【教材購入】 ・セントロ（旧中心街） ※大統領就任式 ・研修報告準備 ・懇親会	アスンシオン
9	8月16日 (木)	・報告会 【移動】 JICA 事務所→シルビオ・ペッティロッシ国際空港 空港チェックイン→パラグアイ発（13:35 発） パラグアイ→サンパウロ→アトランタ	機内泊
10	8月17日 (金)	アトランタ→成田	機内泊
11	8月18日 (土)	成田空港着（14:35 着）	日本

参加者氏名

	氏名	県名	所属先	担当教科
1	中内 利恵	愛媛	新居浜市立西中学校	英語 (2年)
2	宮内 宏子	愛媛	愛媛県立今治特別支援学校	特別支援教育 (3年)
3	大石 公美	高知	高知県立南中学校	英語 (1年・2年)
4	鎌田 晃世	徳島	板野町立板野東小学校	生活・体育 (2年)
同行者				
5	梅林 恭子	愛媛	愛媛新聞社	
6	井川 太士	香川	JICA 四国	

海外研修レポート

担当日： 平成30年8月8日（水）

記録者：中内 利恵

1) 訪問先： 出発日 各空港～羽田、成田～アトランタ、アトランタ～サンパウロ、
サンパウロ～アスンシオン（パラグアイ）

2) 研修内容：

●パラグアイに行く前の印象と着いた後の印象をまとめよう。

3) 所感：

四国の各地域からの集合ということで、全員と出会えたのは、成田空港であった。当日は、ちょうど台風18号の影響で各航空会社が早々と欠航を出す中、私たちが乗る予定のデルタ航空の夕方のフライトは、何とか台風上陸前ということで、少し早めに出発することができた。朝から連絡を取り合いながら、大きな期待と台風による不安と、前回の研修会で会って以来のメンバーとの再会ということで、皆の表情からそれぞれが緊張しているように見えた。

パラグアイを訪問する前の私のパラグアイに対する印象は遠い南米にある国としかなく、インターネットで得た情報からぼんやりとした印象だけをもっていた。

成田からまずはアメリカのアトランタ空港に到着。12時間のフライトと3回の食事、エコノミークラス症候群にならないための水分の補給には体が対応しきれず、疲労を感じつつパラグアイへの訪問に大きな期待を抱き、アメリカへの入国審査へとすすむ。次のブラジル、サンパウロ空港への出発時間までには、5時間ありその5時間何に使えるか、持ってきたスペイン語の本を開きスペイン語を1つでも覚えようかなどと考えていたが、この後アメリカでの入国審査の厳しさを初めて知る。テロ対策として入念なチェック体制をとっており、本国米国旅券保持者はすんなりと通過するのを横目に、ほとんど進まない外国旅券をもつ我々は一体いつになると米国へ入れるのかと苛立ちながら、ただ少しずつ進む列で待つ。ようやく我々の順番が終わり、気がつくとも2時間30分ほどかかっており、更に疲労感を感じる。

アトランタ空港から9時間のフライトでブラジルのサンパウロ空港へ到着。疲労度のピークも超え、ほとんど声も出ないほどになっていた。アメリカでの入国審査が厳しかったため、ブラジル入国の際も身構えたが、ほとんど何の問題もなくすぐに通過。アメリカとの違いを感じる。小さい出発ゲートを発見し、移動。この飛行機に乗れば目的地パラグアイ、そう思うと少し落ち着く。

サンパウロ空港から2時間のフライトでアスンシオン空港へ到着。2日近くのフライトの疲れは吹き飛んだ。



（出発成田空港の飛行機からの眺め）（日本時間夜11時半に出た一回目の食事）

1) 訪問先：パラグアイ到着（シルビオ・ペッティロッシ国際空港）、
JICA パラグアイ事務所、マリスカル・ロペス・ショッピングセンター、アスンシオン市ホテル

2) 研修内容：

- JICA パラグアイ事務所にてパラグアイの現状について学ぶ
- マリスカル・ロペス・ショッピングセンターにて両替と教材等購入

3) 所感：

日本出発から約40時間後、パラグアイの首都アスンシオンに到着した。参加者の中には、「永遠に辿り着くことがないのではないかと感じた」という人もいたりするほどの長旅であったが、アスンシオンの空港で入国審査を終え、大きな自分の手荷物を手にした時、いよいよ研修が始まるのだという気合が入った。そして、空港の到着ロビーでは、JICA パラグアイ事務所の大石所員が、素敵な笑顔で迎えて下さった。

車窓から見える景色はどれも新鮮で、早くもカメラのシャッターを何枚も切った。中でも一番印象深かったのは、桜に似た鮮やかなピンクの花（ラパチョ）であった。パラグアイの現在の季節は冬であるため、枯れ葉などの暖色のイメージをしていたが、アスンシオンの気候は、日中は日本の春の陽気に少し似ており、そのためか多くの花が咲いていて、青い空に色とりどりの花、そして赤土でできたレンガの建物と日本にはない色味の景色が印象的であった。

JICA パラグアイ事務所では、職員の方からの健康管理オリエンテーションを受けた後、パラグアイについての概要や日本との関係、そして日系社会についての概況等をお聞きした。日本とパラグアイの二国間関係では、「格差是正」と「持続的開発」を重点に置き、いろいろなプログラムの中で日本が、大学生から企業の方々など幅広い人材を派遣し、関わっていることが分かった。また、日系社会については、1936年に初期移住者がパラグアイに到着したことや、その最初の移住地がラ・コルメナ移住地であったことなどの歴史から始まり、現在はパラグアイに日系人が約10,000人いることや、日系社会を支える日本人会や日系団体の存在など現在の概要もお聞きした。私自身、興味深かったのは、日系社会の課題である。高齢者福祉への対応や、日本語教育における教師の不足や学習インセンティブの低下、日本人としてのアイデンティティの維持、そして日系社会とパラグアイ社会との格差是正など、日本と同じ課題もあれば、日系社会独自の課題もあった。アイデンティティについては、これからの研修でも私の中のキーワードとなった。また、日系社会との連携という点では、地方自治体との連携で香川県から現役教師派遣の制度があったり、高知からは、「よさこい」の普及ボランティア派遣、「野球」ボランティアの継続的派遣に向けて高知ファイティングドッグスが訪問されていたりと、四国との強いつながりを感じられたことが嬉しかった。説明終了後は、JICA 事務所があるビルの13階へ移動し、アスンシオン市内を一望した。やはり、このとき感じた印象も青い空に、ピンクの花々、そして赤土色のレンガ屋根であった。そしてもう一つ、「山がない！！」であった。

その後、事務所近くのショッピングセンター移動し、両替を行った。日本とは違う色の紙幣。そして、一番驚いたのは、紙幣の桁であった。受け取った紙幣の一番大きい桁は100,000 グアラニー。日本円に換算するには、下2けたを消して2倍したらよいと教えていただいた。つまり、100,000 グアラニーは約2,000円になる。見るもの見るものの表示価格は、日本の表示価格より桁が大きいものばかりで、頭が混乱してしまった。集合時間まで、売られている物の情報収集を行うことができた。夕食は、JICA 事務所の方々と一緒に、肉料理をレストランでとった。振舞われた肉料理はアサードというパラグアイの焼肉料理で、日本の焼肉ではあまり食べられないような部位もたくさんでてきた。また、その他にも地元の食材やデザートなどもあり、おいしい食事と楽しい会話でパラグアイの1日目を終えた。



一望したアスンシオン市内



パラグアイの紙幣



販売されている服（10万!?!）

1) 訪問先：Colegio NIHON GAKKO
カテウラ音楽団
英雄広場
アスンシオン市内ホテル

2) 研修内容：

●Colegio NIHON GAKKO

- ①学長、校長挨拶 ②現地教員との意見交換 ③現地教員授業視察
④西野 JOCV の授業視察 ⑤生徒との交流 ⑥西野 JOCV との意見交換 ⑦昼食

●カテウラ音楽団

- ①カテウラ地区視察 ②音楽団の説明 ③音楽団練習視察 ④写真撮影
⑤指導者との意見交換

●英雄広場

教材購入

3) 所感：

ホテルを出て、最初の訪問先へ移動中、通訳のエリカさんが同行に加わった。とても明るく元気な方で、一気に車内が明るくなった。そして、その後車が走ること数分、建物に大きくと NIHON と書かれた文字が視界に飛び込んできた。車から降りると、西野 JOCV が爽やかな笑顔とともに私たちを迎えてくださり、学校へ招き入れてくれた。学校に入ると、小さな小学生の児童たちが旗を振りながら温かく迎えてくれた。この時に、スペイン語の挨拶を完璧に覚えた。本学長及び校長先生は日本へ留学した際に、日本の教育に感銘を受け、帰国後に NIHON GAKKO を創設されたそうで、5S を大切にされていたり、規律を守ることや時間厳守などを校則として取り入れたりして、徹底的に取り組んでいた。お二人の話から、改めて日本の教育の素晴らしさや、日本人が勤勉であること再認識させてもらった。また、日本のことを褒めていただくことで、自分の国を誇りに思うことができた。その後、学校内を移動して現地教員の授業を参観した。学校内の移動中、多くの生徒が「Hola!」と元気に挨拶をしてくれ、現地の先生方には、現地の挨拶の仕方のハグと頬へのキスをしているのを見た。先生方と生徒たちの距離の近さを感じ、日本とは違う距離の近さだと感じた。現地職員の授業は小学校1年生と2年生の授業を中心に、数分ずつ参観した。児童たちの反応は日本の児童たちと違いは感じられず、低学年ならではの、先生の指示に一生懸命従おうとする姿が印象的であった。その後、西野 JOCV と現地教員とのチームティーチングを参観した。小学1年生で3桁の計算をしており、日本より沢山の桁数を扱っているようで驚いたと同時に、国内で流通しているお金の桁数を考えると納得のような気もした。西野 JOCV と現地教員が行っている算数の授業内容は、自分自身が日本で学習した足し算の手法と同じで、そこに日本の算数教育の素晴らしさを感じた。また、西野 JOCV は現地教員に、生徒たちが思考するような指導方法を教授されており、初めて現地での協力隊の活動を見て、教育分野における JICA ボランティアの役割や取り組みを知ることができた。約60分の授業を、低学年の児童たちが飽きないように、いろいろと創意工夫して取り組まれ、児童たちのノートを見ると、多くの生徒が解答できており、取り組みの成果も見ることができた。授業後は、児童たちから大変素敵なプレゼントのキーホルダーをいただいた。パラグアイの国旗の3色(赤・白・青)の糸で編んだものと、3色のリボンが付いたキーホルダーで、1人の児童の母親が作ってくださったようだ。わざわざ準備して下さっていたことに、嬉しさと感謝の気持ちが込み上げた。その後は、中学2年生たちとの交流授業が始まった。2つのグループに分かれ、それぞれが考えてきた活動を行った。生徒たちは時間の限り、積極的に活動に取り組んでくれ、私たち自身にとっても思い出深い交流授業となった。なにより、新しいものに対する生徒たちの興味津々の表情や反応が忘れられない。その後の西野 JOCV との意見交換では、西野 JOCV の熱い思いに圧倒されることもあったが、日本の教

育の素晴らしさや、現地の学校をより良くしようと努められている西野 JOCV の努力に感銘を受けた。パラグアイの伝統的なスナック「チパ」やおいしい昼食でお腹も満たされた後、再び先生方の心温まるお言葉や校長先生のこれからの大きなビジョンを聞かせていただき、学校を後にした。

次に向かったのは、カテウラ地区である。道中、どんどんと道が悪くなり、口を開けていると舌を噛んでしまう程、車体が揺れる地域に入っていった。今まで通っていた舗装された道とは全く違い、赤土に大きな水たまりのある道だった。そして、車が進むにつれて見えてきたのは大きなごみの山だった。その山の上には無数の鳥が飛んでおり、少し窓を開けると、鼻を衝くにおいがした。その光景があまりにも衝撃的で、カメラのシャッターを切れなかった参加者もいた。また、私にとって衝撃的だったのは、裸足でサッカーをする少年たちだ。テレビなどで見た光景を目の当たりにし、何も言葉が出てこず、ただ頭の中には、この現状を自分の生徒たちに伝えたいという思いだけが浮かび、夢中でカメラのシャッターを切った。そして、先ほどまでいた NIHON GAKKO とその周辺地域とこのカテウラ地区の光景を対比し、初めてパラグアイの貧困格差を感じた。その後、車はあるレンガ造りの建物の前に止まり、小さな入り口を入ると壁に大きな音符が書かれた建物の前に着いた。音楽団の大事な楽器を管理している部屋へ通していただき、そこで音楽団についての説明を聞いた。その後、音楽団の方々の演奏を聴いた。廃材や、ドラム缶でできている楽器を、本物の楽器と変わらない音で奏でている演奏に、1曲目を聞いたときは鳥肌が立った。とても真剣な眼差しで、音を楽しむように演奏している生徒たちからは、先ほど見た光景の中での生活は結びつかず、意見交換を通して初めて、彼らが抱えている困難さを垣間見た気がした。「自分の環境を悲観的に思い、自分がなぜ生まれてきたのかと思う時もあったが、音楽がそれを救ってくれた」という言葉がとても心に残っている。そして、多くの生徒たちが、音楽ではなく、音楽は趣味として、別の道で頑張ろうとしている姿に驚いたと同時に、素晴らしいと思った。そこには、指導にあたられている先生の信念がしっかりと生徒たちに伝わっているのだなとも感じる事ができた。音楽団ができた当初からいた子どもたちが、現在20代前後ほどになっている。彼らがこれからも音楽を楽しみながら、自分の人生を切り拓いていくことを願うばかりである。カテウラ地区を後にして、英雄広場で伝統工芸品などの購入に出かけた。マテやテレレのコップやニヤンドウティ、木彫りのニワトリの厄除け、民族衣装などいろいろなものがあり、教材としてそれぞれが数点購入した。初めての紙幣使用は、やはり上手に使うことができず、優しい店員さんにお金を確認してもらいながらの購入であった。

日本の算数教育を取り入れた授業

(西野 JV と現地教員)



カテウラ音楽団



アスンシオン市内の道路



カテウラ地区の道路



- 1) 訪問先：①アスンシオン日本語学校
②パラグアイ人ホームステイ先

2) 研修内容：

●アスンシオン日本語学校

各教室の授業を見学。4つのクラスで各自交流授業を実施。校長先生から学校の紹介及び日系社会青年ボランティアで活動している羽石瑛さんとの意見交換。

●パラグアイ人ホームステイ先

1人1家庭でのホームステイ。18時前後に到着し、翌日夕方まで現地の生活を体験。

3) 所感：

アスンシオン日本語学校は、1967年に設立された日本語学校である。「国語および日本語教育を通して、日本文化を理解し、広い視野と豊かな人間性を身につけた子供を育てる」を教育目標とし、日系社会や文化を大切にしていこうと熱心な教育が行われていた。全校が集まる朝礼ではラジオ体操や「島唄」を合唱し、日本の学校にもある光景が見られとても驚いたと同時に懐かしい気持ちにもなった。各教室では、ここがパラグアイであるということを忘れる程、「日本の授業」が行われていた。使われている教科書やドリルはコピーではあるものの、日本と同じ教科書を使用していた。教科書の新出漢字の指導や、グループでの討論等が行われていた。交流授業では、日本の文化を紹介したりクラスの子どもたちに手紙を書いてもらったり、充実した交流となった。授業が日本語で行われていたので、急遽将来の夢を書いてもらうことにしたが、日本語で書くことは難しかった様だった。日本語を聞く力はあるが、話したり書いたりする伝える力は課題だという話があった。日系社会青年ボランティアで活動している羽石瑛さんと意見交換では、試行錯誤しながらも現地で活躍している話を聞くことができ、とても貴重な時間となった。

イグアス市のパラグアイ人のホームステイ先に移動した。アスンシオンから5時間ほどの移動では、首都から離れていくに連れて広大な土地が広がっていた。同じパラグアイでも全然違う印象を受けた。ホームステイに1人で行くことはとても不安で、「うまくコミュニケーションはとれるだろうか」と心配だった。参加者の4人とも楽しみと不安が入り交じった中、それぞれのホームステイ先に行ったが、温かく家族の一員のように迎えてくれたホストファミリーのおかげで、すぐ打ち解けることができ、不安な気持ちもすぐなくなった。一緒に夕食をとったり、テレビを観たり、それぞれの家族の話をしたりした。スペイン語が全く話せなかったので、スマートフォンを駆使し、どうにかコミュニケーションをとることができた。お互いの伝えようとしていたことが相手に理解してもらえた時は、とても嬉しかった。もっと話すことができたなら、お互いのことがより知れたり、気持ちも伝えたりできたのにと今となっては思う。言葉の大切さを実感した。その他には私が日本から持って行ったお土産にとっても喜んでくれたことがうれしかった。お菓子やシール、扇子、日本と書いてあるはちまき、お箸など、すぐに食べてくれたり、遊んでくれたりして喜んでもらった。ホームステイ先のママからは、日本に帰ってからもずっと気持ちは繋がっていられるようにと、手作りのブレスレットをもらった。今もカバンにつけている。一期一会の夢のような楽しい夜はあっという間にすぎ、幸せな時間を過ごすことができた。



(アスンシオン日本語学校にて：新出漢字の書き順)



(羽石 JOCV の授業の様子：1年生に絵本の読み聞かせ)

1) 訪問先：①パラグアイ人ホームステイ先

②移住史料館

③イグアス市日系人（四国出身移住者）との懇親会

2) 研修内容：

●パラグアイ人ホームステイ先

4人それぞれが各ホームステイ先で、昼過ぎまで楽しい時間を過ごした。

●移住史料館

幼い頃に移住してきた園田さんが館長をしている。移住者が持ち込んだ農機具や移住当時の写真などが展示されている。移住の歴史や園田さんが経験したことなどを伺った。

●イグアス市日系人（四国出身移住者）との懇親会

日系人が経営する福岡旅館にて、四国出身移住者の方たちと懇親会を行った。

3) 所感：

ホームステイ2日目。日曜日ということもあり、朝はゆっくり過ごした。家族みんなで朝食のパンと甘いコーヒーを食べた。庭でお昼ご飯のアサードの準備を手伝った。丸ごとの鶏肉と大きな豚肉、ソーセージをたくさん買って、前日から香辛料で味付けをして仕込みをしてくれていた。ご飯の用意の合間にドライブに連れて行ってくれた。近所に住んでいる日系人の畑や、ホストファミリーの仕事場、スーパーマーケット、学校など説明をしながらいろいろな所に案内してくれた。家に帰ってきてから、ホストマザーと家の周りや庭を散歩した。一番驚いたことはたくさんの鶏がいたことだ。何匹いるか分からないほどの鶏が卵を産みに来たり、餌を食べにきたり、自由に歩き回っていた。その側には犬や猫がいて、日本にはないのどかな風景だった。また家の裏にはどこまでも続く小麦畑が広がっていて、言葉を失うほどの絶景だった。お昼のアサードは、音楽を流して庭でテレレをしながらおしゃべりをし、大きなお肉を時間をかけて焼いてくれた。焼きたての肉はとてもおいしくて、今でも忘れられない味。楽しい時間はあっという間に過ぎ、帰りの時間になった。お別れするのがとても寂しかった。来る前は正直、泣きそうになるくらい不安だったホームステイ。帰りはお別れが寂しくて涙をこらえるのに必死だった。たった2日間だったが、夢のような時間を過ごした。これからはずっと連絡を取り合う関係でいたい。

4人それぞれをステイ先に向かえに行ってから移住史料館に行った。移住史料館では、館長であり自身も移住した過去がある園田さんから話を伺った。移住の歴史等を当時の写真を見ながら学ぶ機会になった。私自身、移住についてあまり知識がなかったが、園田さんの話はとても分かりやすく、心に響くものがあった。園田さん自身の移住の過去の話はとても壮絶で、リアルな体験談だった。特に心に残っているのは、「100人いたら100通りの移住の歴史がある」という言葉だ。いろいろな思いをもって、パラグアイまで来た日本人。先人たちの苦労は計り知れないもので、その苦労と努力で今の日系社会があるのだと改めて感じた。日本の反対側にある遠いパラグアイの地で活躍した日本人の素晴らしさを知った。

福岡旅館で四国出身移住者の方と懇親会を行った。まず、日本に戻ってきたかと思うような雰囲気と、日本料理にとっても感動した。福岡旅館の奥さんは私たちをととても温かく出迎えてくれ、家に帰ってきたような安心感を覚えた。懇親会では愛媛、香川、徳島の出身者が集まり、初めて会った

にも関わらずとても親近感がわいた。私がお話した原さんは、3歳の頃に家族や親戚と徳島から移住してきた方である。50年以上も離れている日本、徳島のことを今でも愛していた。子どもの頃の話を生き生きと話す姿がとても印象的だった。離れていてもいつまでも日本人らしさを大切にしている日系人の方と話をすることができ、遠く離れたパラグアイでの日本を感じることができた。



(ホームステイ先にて)



(移住史料館にて園田さんの話) (四国出身の方との懇親会)

担当日：平成30年8月13日（月）

記録者：中内 利恵

1) 訪問先：イグアス日本人会

ポトレロ・グアジャキ市保健ポスト

ニヤンドゥティ生産者の制作観察

2) 研修内容：

- イグアス移住地の歴史や豆腐百万丁プロジェクトについて知る
- 保健ポストの施設視察及び村上 JOCV の活動視察と意見交換
- パラグアイの伝統工芸ニヤンドゥティについて知る

3) 所感：

イグアス日本人会の事務所では、堀田利幸会長と平野陽三事務局長からお話を伺うことができた。初代の日本人の方たちから世代交代が行われ堀田会長や平野事務局長は2世世代だと聞く。パラグアイに到着してから実際に実感したことは、パラグアイの人たちは親切で温かく、親日家が多いということだ。訪問する各学校では温かい歓迎を受け子供たちのきらきらとした表情で迎え入れられる学校訪問やホームステイ

先での対応は、初代日本人の方たちの功績が大きかったと実感することができた。

現在のイグアス日本人会の出身では、高知県出身者も多いと聞き非常に身近に感じることができた。活動の中では、日本人会の運営や収入源となっている採石場についても教えていただき、採石場へは、直接案内していただき実際に活動をしている現場を見ることができた。パラグアイの道路は石畳が基本であり、石畳用の石は今でも手で割る方法が最も良いそうで、直接割っている様子などもみる。

事務所でお話を伺っている際に、前会長の福井一郎さんも参加していただき、東日本大震災の際に行われた豆腐100万丁プロジェクトについても教えていただいた。非常に熱意をもって日本の被災された方々へ何かしたいと行動されたのだと改めて知り、パラグアイに住んでいる日系人の方々の温かさを感じた。

午後からは、ポトレロ・グアジャキ市保健ポストを訪問。パラグアイの学校には保健室のようなものがないと聞いたのは驚きだった。徳島県出身の村上菜々美青年海外協力隊員の活動を実際小学校での活動を視察。小学1年生の手洗いの啓発活動を行っていた。保健ポストの仕事の役割や活動は多岐にわたり、地域の方との密着したものだと感じた。村上隊員のホームステイ先にもお邪魔して、隊員としての活動の話聞いた。

その後、イタウグア市内のホテルへ移動。荷物を置いてすぐに、食堂の片隅でパラグアイの伝統工芸のニヤンドゥティ制作を観察する。説明の中で、細い糸の作品の作成には技術力を要するため高価となってしまい、あまり売れないそうである。最近では安価な太い糸での作成をすることが多いそうだ。どの作品も美しく教材購入には、選ぶのに時間がかかった。



(日本人会が保有する採石場) (村上 JOCV と同僚による啓発活動) (ニヤンドウティ制作風景)

1) 訪問先：①サン・エンリケ・デ・オッソ小学校

②国家職業訓練校

③ペケニヨ・コットレンゴ財団

2) 研修内容：

●サン・エンド・リケ・オソ小学校

校長先生による学校概要説明、授業視察、小学 3 年生との交流授業、現地 JOCV との意見交換。

●国家職業訓練校

プロジェクト紹介、施設視察。

●ペケニヨ・コットレンゴ財団

施設視察、財団の取り組み紹介、パラグアイの障害者支援事業についての説明。

3) 所感：

当校は、半公半民で運営されている学校で、使用言語はスペイン語。子どもによってはグアラニー語で説明することもあるそうだ。この学校の生徒は、全体的に数学の力が弱い生徒が多いとのことで、実際に現地 JOCV の片桐千津香隊員も教材やチェック表を作るなど、子どもたちのかけ算の習得に力を注いでいた。交流授業では、折り紙で紙飛行機を作って飛ばしたり、コマ回し、お手玉、おはじきなど、日本の昔の遊びを行ったりした。子どもたちはどの遊びにも興味を持っていて、好奇心旺盛だと感じた。私が特に驚いたことは、言葉に対する興味であった。和紙の折り紙に子どもたち一人ひとりの名前をカタカナで書いてプレゼントすると、書かれた文字をじっと見つめていたのが、印象深かった。先生からも「名前を書いて」とリクエストいただき、日本文化へ興味を持って頂けた。

国家職業訓練校では、産業界のニーズが高い製造業の分野において、広く活躍する人材を育てるために、短期コースと長期コースに分かれて現場のリーダーを育てる実践的な学びやトレーニングが行われていた。

ペケニヨ・コットレンゴ財団は、11 歳から 68 歳の利用者 68 名が生活していた。施設を案内していただき、説明を受けた。障がいの程度に合わせて利用する部屋が分かれており、利用者のニーズに応じて生活環境が整えられていた。男性棟に入ると、利用者の方が私たちの方に来てくれて、明るく出迎えてくれた。私は、初めて訪れた場所であるのに、彼らと接していると懐かしさや安心感を持った。この施設は、家族と離されるなど、辛い経験をした利用者の方々が、人の温かさを感じられる「家」や「家族」となっているのだと思う。パラグアイでは、親と引き離された人、路上で生活していて命を落としかけた人など、当施設に来るまでに大変な経験をしていることを知った。彼らがこれからの毎日を笑顔で過ごせるように、そしてこのような施設が増えて寂しく辛い思いをする人がいなくなる社会になればと思った。



算数の学習に取り組む子どもたち



ペケニヨ・コットレンゴ財団
利用者の方々



職業訓練校の溶接のシミュレーション

- 1) 訪問先：①アスンシオン市内
②アルパ・ロガ（懇親会会場）

2) 研修内容：

●アスンシオン市内

ランバレの丘、教材購入、昼食

●アルパ・ロガ（懇親会会場）

現地JOCV、JICA職員との意見交換、研修での感想発表、アルパ（ハーブ）鑑賞

3) 所感：

ランバレの丘に登ると、アスンシオン市内が一望できた。研修前半で訪れたカテウラに集められたゴミの山と廃液のプールも見えた。そこに暮らす人々の現状や格差について、国が抱える課題があることを改めて思い知った。アスンシオン市内散策では、大統領就任式当日ということもあり、車が進入できる区間が制限されていた。今までは、大きな暴動などは起きていないとのことであったが、教材購入で立ち寄った露店には、できるだけ身軽な格好で行くようにした。現地でしか手に入らない教材を日本に持ち帰ろうと、地図、国旗、書籍（絵本）、マテ茶を飲むための道具、革製品、ニヤンドウティ製品などを購入した。日本に教材を持ち帰り、パラグアイの文化や習慣など、授業を通してどのように子どもたちに伝えられるだろうか。私たちが見たことや感じたことが、日本の子どもたちに強いインパクトを与えられるようにしたいと思った。

イベント会場付近では、先住民の人たちがおり、その中にいた5～6歳の子どもが私たちの昼食中、近寄ってきた。少女は何も言わず、しばらくするとその場を離れて行ったが、きっと私たちから何か食べ物をもらおうと思っていたのだと思う。このような光景は、研修中に何度も見てきたが、社会の格差が直接子どもたちにも影響が及んでいることがわかった。

アルパ・ロガでの懇親会では、本研修でお世話になった方々が集まってくださり、1週間の振り返りができた。私はアスンシオン日本語学校の日系社会青年ボランティア羽石瑛隊員から日系の子どもたちのアイデンティティについて、詳しく話を聞かせてもらった。そこでは、「言葉」と「アイデンティティ」は関連があるようで、日本語能力試験で高いスコアを修める人には、「日本人」という意識が大きいようだ。近年では、日系の家庭でも日本語を話さなくなっているところが増えているようだが、母国語を大切にすることは、自分が何者であるかを強く意識付ける重要な役割を果たしているのだと、深く考えさせられた。ハーブ演奏を聴きながら、研修中に回った施設やそこで出会った人たち、現地の隊員の方々の取組など思い出した。自分の目で見たことや感じた現実を一瞬の出来事で終わらせないようにしたいと思った。

ランバレの丘



アルパ演奏

1) 訪問先：JICA パラグアイ事務所
シルビオ・ペッティロッシ国際空港

2) 研修内容：

- JICA パラグアイ事務所
研修結果報告
- シルビオ・ペッティロッシ国際空港
大石所員と通訳エリカさんとの最後の食事とお別れ

3) 所感：

始まりがあれば、終わりがあるというが、こんなに早くこの日を迎えるとは思ってもせず、この日の朝は、帰国するのが半信半疑であった。そんな中、研修結果報告を行いJICA パラグアイ事務所へ向かった。この時は、寂しさより、発表内容のことで頭の中がいっぱいで、余裕を持つことができなかった。そんな余裕がない中、事務所に着くと、青年海外協力隊の村上さんが傍聴に来て下さっており、嬉しさとやる気が込み上げてきた。4人それぞれが感じたこと、学んだこと、そして帰国後どのような授業をし、この経験を生徒たちにどう還元していくかを、時間いっぱい報告を行った。同じ視点で感じたことや学んだこともあれば、それぞれが違う視点で物事を捉えているところもあり、それぞれの発表を聞くことでさらに自分の考えを深めることができた。4人が共通に感じたことは、パラグアイの人の温かさ、日本人としての誇りであった。また、アイデンティティーやコミュニケーションの大切さも学んだ。校種も対象年齢もバラバラな私たちがどのような授業をするのかがとても楽しみであり、互いにこれからも高めあっていきたいと改めて思った。

別れの挨拶済ませ JICA パラグアイ事務所を後にし、空港へと向かった。空港の正面入り口を見ると、昨日お別れをしたエリカさんが待ってくださっていた。スーパーで手に入れられなかったチパの粉を持ってきてくださり、エリカさんの底知れぬ優しさに胸の中が温かくなった。そして、今日までお世話になったドライバーさんともお別れである。搭乗時間までの間、みんなで最後の食事をとることに。エリカさんが買ってきてくださったエンパナーダを頂いた。とってもおいしく、最後の食事でも幸せな満腹感とみんなの笑顔で終えることができた。

いよいよ搭乗時間となり、出国審査を受けて、荷物検査場へ。姿が見えなくなるまで、大石所員とエリカさんが私たちを見送ってくださった。距離は約 18000km と離れるけれど、またいつか会えるような気がして、涙ではなく笑顔でお別れをした。

再びやって来た長旅の時間。どんなフライトで日本に着くのだろうか。アスンシオンを飛び立つ時だけ、なぜか座席が窓際ではなく、最後に空からパラグアイの土地を眺めたかったと思いながら離陸した。サンパウロまでのフライト3時間は、9日前の自分と今の自分でどう変わったのだろうかと考えながらの3時間で、あっという間であった。今の気持ちが決して風化しませんように…。

最後にお世話になったドライバーさんと！



エンパナーダいただきます！



担当日：平成30年8月17日（金）

記録者：中内 利恵

1) 訪問先：帰り アスンシオン～サンパウロ空港（ブラジル）
サンパウロ空港～アトランタ空港（アメリカ）

2) 研修内容：

●パラグアイで学んだことをまとめ、帰国後の活動へつなげる

3) 所感：

いよいよアスンシオンを去る日がやってきた。濃い1週間を過ごし、私たちの中では連帯感が生まれていることに気が付く。日本と反対側にあるパラグアイで私たちは日本人の誇りについて考える時間を与えられたのではなかったかと振り返る。日系1世の方々が積み上げてこられた日本人としての生き方がパラグアイの人々に受け入れられ、尊敬を受ける存在であることは日本人として誇りであると感じた。そして、その初代の方々の背中をみて育った2世3世の方々の努力も素晴らしいと思った。また、自分は日本で日本人としての生き方はどうなのかと反省する時間にもなった。

今回の研修で私は、沢山のひととの出会いに感謝せずにはいられない。今を生きて、日々頑張る姿は本当に美しいと思った。今回パラグアイに行くことを伝えた兄夫婦をはじめ、先輩や友人には、本当に励まされた。地球の反対側の位置から時々送られる温かいメッセージは、それぞれの所で今を生き、互いに頑張ろうと励ましあっていると感じた。そしてパラグアイで出逢った人たち。色々な状況で、自分たちの幸福のみを考えてはいない、人としてどう生きるべきかを考えている人たちだと思った。パラグアイの今、そしてその未来に向けられている目。今回行動を共にした仲間のひとりにパラグアイで私たちのことを歓迎し、気を配り、汗を流すことをいとわず、すぐに行動に移す姿から、自分も日本に帰ってからもっと頑張ろうと語ってくれた。その言葉に私もはっとさせられた。私はどうなのか。狭い世界の中で何を私は悩んでいたのか。小さいことだと思った。人生の岐路に立ち、悩みながらも歩みを進めようとしている人たちとの出会いも私には大きかった。

日本に戻ってから何をすべきか、何をしたいのか、どう行動していくかを考え始めている。前日に、JICAパラグアイ事務所で何を学び感じたか、テーマ決定と具体的に何をするかプレゼンを行う。今の私には、実際にそれを発表する場所がある。伝えることができる生徒たちがいる。将来、ボランティア活動をしたいと思える生徒を増やしたい。そう思えるようになった。今回青年海外協力隊員の方へJICAボランティアになった動機を伺った際、児童・生徒の時に聞いた話に強く影響を受けたからとお聞きした時には、教育の大切さを改めて感じた。今回のチャンスを生かしていきたい。今回のパラグアイ訪問は私の中でずっと力を与えるものだ。ありがとうございました。



(JICAパラグアイ事務所からのアスンシオン市眺望)